



物語は起承転結

永田円了

Transform Your Thinking

イソップ物語に「ウサギとカメ」の物語がある。江戸時代の初期、ポルトガルから日本に伝えられたものである。ウサギとカメが競争して、勝てるはずのないカメが勝つ、という痛快なストーリー。では、果たしてこの勝負、どちらが先に競争しようと言い出したのであったろうか。ウサギか、さにあらず、カメの方であった。

歌の文句を思い起こしてみよう。「もしもしカメよカメさんよ、世界のうちでおまえほど、歩みののろいものはない、どうしてそんなにのろいのか」

「なんとうおっしゃるウサギさん、そんならおまえとかけくらべ、向こうのお山のふもとまで、どちらが先にかけつくか」



有りえないような可能性に挑んだカメさん、みごと“自分にはできない”という思い込みの殻を破って、ウサギより先にゴールに到着した。物語というものは、このように意外性があるから成り立つものである。“梅檀は双葉より芳し”式の天才伝説は、物語にはならない。

起承転結

何かことが起こる<起>、それを受け入れる<承>、受け入れることによって意識が変わる<転>、新しい意識によって次の行動が生まれる<結>。人生というものは、このような過程で成長し深まってゆくのであろう。起承転結は、なにも作文の手法だけではない。



ことが起こった時、まずそのこととしっかり向き合うことである。「承・転」を飛ばしてすぐ「結」に走ると、ただ「起」に対して条件反射的に反応するだけである。その反応の中には何か人間的な気遣い、奥ゆかしさ、気づきは存在しない。押されれば、押し返すような短絡的な行動があるのみである。

40年前に住職だった父が亡くなった。と同時に寺の跡継ぎ問題が起こる。当時30歳の私にとって、この出来事をどう受け入れたらいいのか、数年悩む。その数年が私にとってその後の成長の原動力にもなるものを残してくれた。

現実を受け入れることを決めた後の行動は迅速だった。お寺の役割を再構築しよう。エネルギーが燃えた。それから数年後、お寺が新しく再建、行事内容も一新された。「起」「承」「転」「結」が絵に描いたように展開されたのであった。

<事例 DVD>

炎鵬のコマーシャル／ひっくり返せ

炎鵬の取り組み／朝の山など

パラダイムシフト／3.11の津波による意識の変容

NHK 令和家族／野村克也氏と橋田壽賀子の対談

横山裕（元・関ジャニ）／里子・まなとくんと話す

プロ野球選手・川崎宗則の起承転結

歌・ビートルズ／ポール・マッカートニー／Hey Jude



円了のホームページ: www.enryo.jp